

II 小学校 中学年

いのちを かん 感じよう

しぜん
自然 やいのちの
大きさをふしぎさを
ぜんしん
全身で感じてみよう

(出典：文部科学省「心のノート」 小学校3・4年 p.51)



3 わたしは お姉ちゃん

みほは、お母さんのおなかに手をあて、話しかけました。

お母さんのおなかの ちようどおへそのあたり。

「あかちゃん、こんにちは。今、何をしているの？」

すると、お母さんは、みほに言いました。

「あかちゃんが、お話ししているわよ。『おねえちゃあん』って」

「えっ、お母さん、どうしてわかるの？」

お母さんは、みほをそつとだきよせました。

「あかちゃんは、まだ、言葉は話せないけれど、足でお返事ができるのよ。」

「足でお返事するの？」

みほは、おどろいて、お母さんのおなかをじつと見つめました。

「そうよ。みほも元気に足でお返事していたのよ。」

みほが、お母さんのおなかの中にいるとき、

お父さんもお母さんも、うれしくてたくさん話しかけたのよ。

『みほちゃん、元気ですか？』って。

みほは、足でお母さんのおなかを

『ぽおん』ってけて、

『はあい。元気ですよ』って教えてくれたのよ。

みほが、お母さんのおなかの中で、

少しずつ大きくなって、そして生まれてきてくれて、

お父さんもお母さんも

みんなが、とつてもよろこんだのよ。」

「ねえ、お母さん。みほが生まれてきてしあわせ？」

「もちろん、しあわせよ。

みほは、お父さんとお母さんにとって、

とても大切な人。

ほかのどんなものより大事な大事なのちよ。」

みほは、もう一度お母さんのおなかに、そつと手をあて、顔を近づけてやさしく話しかけました。

「あかちゃん、こんにちは。

わたしは、あなたのお姉ちゃんよ。

世界でたった一人のあなたのお姉ちゃんですよ。」

お母さんのおなかが、「ぽおん」とふくらんで、みほのほつぺたにも、あかちゃんの元気なお返事が返ってきました。



< 資料 >

お母さんからの手紙 ～親から子へのメッセージ～

ひかる、おたん生日おめでとう。

あなたがおなかにいるとき、
ときどき動くあなたを感じながら
あなたがぶじに生まれるよう
お母さんは、毎日、おなかをさすっていました。
「元気に生まれてね。」って
何ども声をかけました。

あなたが生まれたとき、
うれしくて、なみだがでました。

顔をまっ赤にして力いっぱいなくあなた、
いっしょうけんめいおっぱいをすうあなたは、
まぶしくて、かがやいて見えました。
だから、「ひかる」と名前をつけました。

あれから九年たちました。
自転車に乗れるように何回も練習しているとき、
お母さんもどんなにおうえんしたことか。
ころんでも立ち上がるすがたにせい長を感じました。
あなたが友だちにいじわるしたと聞いたとき、
お母さんはどんなにかなしかったか。
そして、どんなにくやしかったか。

でも、すなおにあやまるあなたを見て、
少し安心しました。

病気やけがをするたびに心配し、
ときにはこまらせられることもあるけれど、
そんなこともお父さんとお母さんのよろこびなのです。
あなたは、お父さんとお母さんの大切な子どもなのです。

ひかる、
これからも、キラキラとかがやいて生きてほしいな。



1 資料名 「わたしは お姉ちゃん」

2 資料について

この時期の児童は、「生まれること、死ぬこと」を現実性をもって理解できるようになるといわれる。低学年で生まれた「命を大切に作る心（命の大切さ）」を土台として、この時期においては「命の尊さを知る心（命の尊さ）」を育み、高学年における「命を尊重する心（命の輝き）」の育成へとつなげる重要な段階である。自分の誕生や生育の過程、病気やけがをしたときの様子などを思い浮かべながら、自分が存在することによって、周囲に楽しさが生まれ、充実した時間が繰り広げられていくことを経験することは、この時期の児童にとって大変重要なことである。

本資料は、お母さんのおなかに宿る新しい命に話しかけるみほの思いや、母親のわが子へ向ける思いを通して、自分の命が大切に守られてきたことを感じ取らせることのできる資料である。おなかの中の赤ちゃんに話しかけるみほに、お母さんは、みほがおなかの中にいたときの様子を話す。みほが生まれてきてくれたことに幸せを感じているお母さんの思いに触れ、みほは、自分がたくさんの愛情を受けながら育てられてきたことにあらためて気づき、新しく生まれてくる命も大切にしようと思う。自分がかげがえのない存在であり、自分の存在そのものが、周囲の人々に喜びと幸せを感じさせていることに気づかせながら、生きることを喜び、命を輝かせて生きる大切さを育んでいきたい。

本時の指導にあたっては、資料を通して、わが子の誕生を心から願い喜び、そしてわが子に愛情をたっぷり注ぐ親の姿をしっかりとおさえたと、いかに自分がかげがえのない存在であるかに気づかせていきたい。なお、展開後段の自分への振り返り（自覚化）に多く時間を要することが考えられるので、時間配分を考慮する必要がある。

3 留意点

学級の中には、様々な理由で父母のいない児童や、自分が大切にされていないと感じている児童がいることも考えられる。そうした児童が疎外感をもたないように留意する必要がある。たとえ父母と暮らしていなくとも、代わりに保護者として自分を支えてくれている人の存在や、自分が苦しいときに支えてくれる人がいることに気づかせることも、本時の重要な学びとなる。

4 事前指導の工夫

自分が生まれる前や生まれたとき、そして赤ちゃんだったころの様子を家族に尋ね、家族の思いに触れさせておく。そのことを、「心のノート」P.74、75 に記入させておくことで、本時の自覚化の段階に生かせるように準備しておく。

5 ねらい

新しい命の誕生によってお姉さんになるみほの気持ちに共感することを通して、自分の命が大切に育まれてきたことに気づき、生きていることを喜び、自分の命を輝かせて生きようとする心情を深める。

4

精霊流し

バババツ、バーン！

長崎のおぼんには、にぎやかな爆竹の音がなりひびきます。

良介は、毎年、家族三人で精霊流しを見に行くのがとても楽しみでした。大きな船、小さな船、いろいろな形の船が町を歩き、ふだんはできない爆竹もさせてもらえるからです。

でも、今年のおぼんはいつもとはちがっていました。大好きなお母さんが、病気で入院してベッドの上だったからです。良介は毎日のようにお母さんに会いに行きました。

「お母さん、今日ね、お菓子もろうたよ。お母さん、食べてよ。」

「ありがとう。でもお母さんはねえ。ごめんね。」

半年前からお母さんは、病気のせいで自由に物が食べられないのです。

「明日は精霊流しよね。お母さんの分まで見てきてね。良介。」

そういつてお母さんは花火代を良介の手のひらにおいて、ぎゅうつと手をにぎりました。良介は急に悲しくなっていました。そして、その悲しみは家に帰つても続きました。

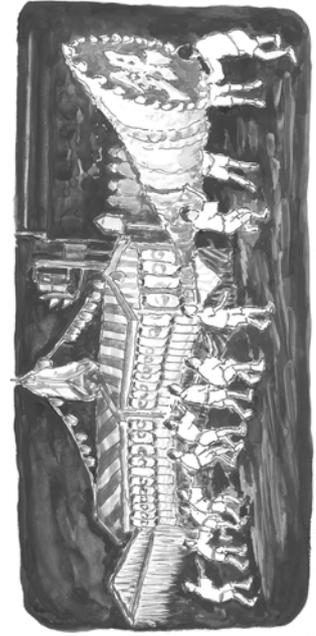
(今年は精霊流しにみんなで行けない。お母さん、帰ってきて。)

部屋のすみでひげをかかえてない良介にお父さんが言いました。

「いつしよに精霊流しに行けなくて一番悲しいのは、お母さんだよ。」

その言葉を聞いて良介は、何かお母さんを喜ばせたい。お母さんのために何かしたいと思いました。ある考えが思いうかびました。

おぼんがすぎて一週間後、良介の願いが通じたのか、お母さんが帰ってきました。良介はうれしくてたまりません。へやをきれいにそうじしました。今までの分をとりもどすようにたくさん話をしました。



「お母さん、精霊流しは見よう。ぼくがビデオにとつておいただよ。」

「ええっ！うれしかねえ。お母さん、見たかったあ。ありがとうね。」

お母さんとお父さんと良介は、良介がとつたビデオを三人で見ました。

バババツ、バーン！

目をとじると、ほんとうに家族みんなで精霊流しを見に行っているようでした。お母さんの手が良介の手にそっと重なりました。お父さんも良介の手をにぎりました。お母さんの目にはなみだが光っていました。

それから一週間家にいて、お母さんはまた入院しました。おなかっぱんぱんにはれて苦しくなったのです。そして…、その日の夜おそく、お母さんは死にました。

「お母さん！お母さん！」

お父さんと良介は何度も何度もお母さんの体をゆすつて声をかけました。でも、お母さんが一度と目をあけることはありませんでした。

次の年の夏、良介の家ではお母さんの精霊船しんまろふねが作られていました。

「お母さんのたましいば、この船でしつかり送つてやろうな、良介。」

船作りを手伝ってくれたおじさんの言葉に良介はうなずきました。そして、おぼんの十五日。今年も長崎にはにぎやかな爆竹の音がひびいています。いよいよ出発の時刻です。お父さんがみなに声をかけます。

「ぞあ、行こう！お母さんが生まれ育つたところを回つてやろう！」

良介は「お母さんへ」と書いた紙ひこうきをそつと船に入れました。そして、木づちをにぎりしめると、力強くかねをたたきはじめました。

「見とつてね。お母さん。お母さん！」

にぎやかな爆竹の音とともに、良介のお母さんへの思いがこもつたかねの音が長崎の美しい夕空に消えていきました。

1 資料名 「精霊流し」^{しょうろうなが}

2 資料について

この時期の児童は、命は何物にも代えがたいものであり、人生は一度しかないことは言葉としては理解している。しかし、多くの児童の家庭で核家族化が進み、生命の危機に接したり、身近な人・最愛の人の死に直面したりした経験をもつ児童は少ない。また、児童を取り巻く環境には、人の命が再生するかのようゲーム等の仮想現実社会や人の命を軽んじるテレビ番組が見受けられ、望ましいものとはいえないものがある。このような中で、真に命の尊さを意識しないまま生活している児童も少なくない。

本資料は、長崎のお盆の行事でもある精霊流しを通して、家族という最も身近で愛する人の死による悲しみや、前向きに生きることの大切さを感じとることができるものである。主人公の「良介」は、精霊流しの賑やかさが好きで、毎年家族で見に行くのを楽しみにしていた。しかし、病気を患いだんだん弱っていく母を見て、命の大切さに気づくとともに、何をすれば母が長生きできるか必死に考えて行動するが、あまりにも早い母の死に無力感を味わう。そんな主人公「良介」が、次の年のお盆に母の精霊流しを行いながら、力強く生きている自分を亡くなった母に報告するという内容である。

本時では、精霊流しに対する主人公「良介」の気持ちの移り変わりを考えることで、最愛の人を失うことがどれほどの悲しみかを感じ取らせたい。その上で、自分が生きていることを実感し、精一杯生きることの大切さやすばらしさをあらためて感じさせ、命を大切にしながら前向きに生きようとする実践への意欲化を図りたい。

また、精霊流しが行われている地域においては、授業の終わりに父母等に精霊流しの思い出を聞くように促すことで、家族で命の大切さについて話し合う機会がもてるようにする。あわせて、その年のお盆が過ぎた後に、家族の思いが伝わる精霊流しの様子を写真やビデオ等で提示して、子どもの心の深まりを読み取れる機会を作り、生命尊重の気持ちを継続的に育てていきたい。

3 留意点

父母を亡くした児童がいることも考えられるので、事前にねらい等を保護者に伝えておくとともに、本時では、発言を強要するようなことがないようにする。精霊流しの様子は言葉では伝わりにくいので、ビデオを準備して雰囲気を感じ取らせたい。(インターネットでも動画を見ることができる。)なお、指導時期は、お盆の前とし、報道等をもとに児童が継続して考えられるようにする。

4 事前指導の工夫

自分の誕生を喜び、成長を願っている家族の思いを実感させ、家族はかけがえのないものという気持ちを持たせた上で本時を行う。

5 ねらい

人の死は、その家族や知人に大きな悲しみを与えることに気づくとともに、亡くなった母の思いを忘れずに生きていこうとする良介の気持ちに共感することを通して、自らもよりよく生き抜こうとする心情を育てる。

6 展開例

過程	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	<p>1 お盆の過ごし方や様子について話し合う。</p> <p>お盆にはどんなことをしていますか。</p>	<p>1 お墓参りや、親戚が集う様子を出し合わせ、長崎の精霊流しについてビデオ等を用いて紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お墓参りをします ・お墓で花火をします ・家族で精霊流しを見に行きます
展 開	<p>2 資料「精霊流し」を読んで考える。</p> <p>お母さんから花火代をもらって、ぎゅっと手をにぎられたとき、良介はどんなことを考えていたのでしょうか。</p> <p>精霊流しのビデオを見ているとき、良介はどんなことを考えていたのでしょうか。</p> <p>良介は「お母さんへ」と書いた紙ひこうきにどんな思いを込めたのでしょうか。</p>	<p>2 精霊流しに対する良介の思いの移り変わりに気をつけるよう、視点を与えて範読する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お母さん早く治ってほしいなあ ・お母さんと行けないなんてつまらないなあ ・お母さんの病気が治らないのかなあ <p>3人で過ごせる喜びとともに、母の涙について良介が感じたことにもふれることを通して、母の思いも考えさせたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビデオだけれど、こうしてお母さんと一緒に見られてよかった ・お母さん、喜んでくれてよかった ・どうしてお母さんは泣いているのかなあ <p>良介が「お母さんへ」の紙ひこうきに込めた気持ちを押し量らせ、手紙形式に書かせたうえで話し合わせることで、精一杯生きている姿をお母さんに報告して安心してもらおうとする良介の気持ちをとらえさせたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お母さん、元気ですか。お母さんがいなくなってとても寂しかった

